

英作文の重要性とその効果的指導に関する一考察

林 孝 夫

〔抄 録〕

近年大学入試や英検などにおける英作文の出題の減少が高校にも影響を与え、高校における英作文・ライティングの機会が以前にもまして少なくなっているのではないだろうかと思われる。そのような状況にある高校生にどのように指導していけば英作文・ライティングに興味を持たせることができるのか、また自由に自分の伝えたいことを英語で表現できるようにすることができるかを次の3点から見ていくことにする。はじめに平成15年度から実施された学習指導要領について考え、次に筆者の一年間の授業実践を振り返りながら検討していく。最後に生徒に実施したアンケート調査の結果をもとに筆者の授業を検証し、先行研究と比較しながらどのような英作文・ライティングの授業が望ましいのかを見ていく。

キーワード：学習指導要領、授業実践、自由英作文、アンケート調査、
理想の英作文・ライティングの授業

はじめに

最近は大学入試においてマークシート化が進み、英語を書くこと、つまり英作文があまり要求されなくなってきた。国公立大学においても2次試験では英作文は出題されているが、センター試験においては英作文そのものは出題されていない。もちろん整序問題としての英作文は出題されているが、筆者がここで意図している日本語を英語に直す英作文や自由に自分の意見を述べていく自由英作文は出題されていない。また、TOEICでは出題されていないし、英検においては前述の整序問題は出題されているが、筆者が意図する英作文となると1級になるまで登場してはこない。今の時代において英作文はそれほど不必要なのだろうか。大学入試において多くの受験生を短時間の間に採点する必要がある、どうしても自由な英作文を出題するのが困難な状況に置かれているのであろうか。また、英作文を受験に課している大学は受験生から敬遠されてしまうのであろうか。その結果高校においてもあまり書くことを要求されなくなってしまったので

はないだろうか。筆者の勤務する大阪府立高校においては入学試験で英作文が課され、その中で受験生は自分の意見を積極的に表現しようとしている姿勢を採点して感じ取ることができる。しかし入学後に英作文に接する機会がなくなれば、中学校時代に身についた英作文の力も低下してしまうだろう。筆者自身も入学試験では積極的に自分の意見を表現していた生徒が、入学後にしばらくすると「書く」意欲を失ってしまっているのをしばしば見かけることがある。現に筆者が担当した学年においても、本格的に英作文を学ぶのは3年生のライティングにおいてであった（もちろんそれまでも文法の時間において、英作文が少し出てきたことはあるが）。しかも学年によってはライティングの中に入試の英文法を入れたりするので、純粋に英作文を学ぶ機会はますます少なくなってしまうであろう。このように英作文の時間が少なくなってきたのは高校側の教え方やカリキュラムに問題があるのだろうか、また前述のように大学の入試問題における頻度が少なくなってしまったのが原因であろうか。以上のことを踏まえ、どのようにすれば生徒に「書くこと」に対する動機付けができるのかを考えていきたい。幸いにして去年は3年生のライティングの授業を主に担当することになった。今まで筆者が担当してきたライティングとの内容の決定的な違いは、今までは文法が中心で、その中に英作文が一部組み込まれているというのが多かったが、去年の場合、純粋にライティングの教科書を一冊仕上げていくことを主眼に置いた。筆者としても英作文をどのように教えていけばいいのかという戸惑いもあったが、同時にこの一年間で生徒に少しでも英作文に興味を持ってもらいたいという願望も強くあった。さらには今後の生徒の異文化コミュニケーションに少しでも役に立つことができればという強い願いから新学年が始まった。筆者自身いろいろ悩み、試行錯誤しながらのライティングの授業を振り返っていきたいと思う。

第1章 高等学校学習指導要領

平成15年から新しい教育課程が実施され、筆者がここで取り上げようとしているライティングについても大きな変化が見られる。そこで、この章では学習指導要領の観点からライティングについて見ていくことにする。

1. 改訂の経緯

「今日、国際化、情報化、科学技術の発展、環境問題への関心の高まり、少子高齢化社会の到来など、社会の状況が大きく変化する中で、21世紀を生きる人材を育てるため、豊かな人間性をはぐくむとともに、一人一人の個性を生かしてその能力を十分に伸ばす新しい時代の教育の在り方が問われている。

このような背景の下に、平成8年7月の中央教育審議会第一次答申においては、これからの学校教育の在り方として、〔ゆとり〕中で自ら学び自ら考える力などの〔生きる力〕の育成を基

本とし、教育内容の厳選と基礎・基本の徹底を図ること、一人一人の個性を生かすための教育を推進すること、豊かな人間性とたくましい体をはぐくむための教育を改善すること、横断的・総合的な指導を推進するため「総合的な学習の時間」を設けること、完全学校週5日制を導入することなどが提言された。」⁽¹⁾

2. 改訂の要点「ライティング」

「書くことが文字によるコミュニケーションであることを踏まえ、情報や考えなどを英語で適切に書く能力を育成することとした。特に、書く目的を考えながら効果的に書けるようにするため、書く過程を重視した指導を行うとともに、書く能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることとした。」⁽²⁾

3. 外国語科の目標

「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

外国語科の目標は次の三つの要素から成り立っている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- ③ 外国語を通じて、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養うこと。」⁽³⁾

次に筆者がこの論文で論じようとしているライティングについて学習指導要領では次のように述べられている。

4. ライティング

1 目 標

「情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

2 内 容

(1) 言語活動

生徒が情報や考えなどの送り手や受け手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようなコミュニケーション活動を行う。

ア 聞いたり読んだりした内容について、場面や目的に応じて概要や要点を書く。

イ 聞いたり読んだりした内容について、自分の考えなどを整理して書く。

ウ 自分が伝えようとする内容を整理して、場面や目的に応じて、読み手に理解されるよ

うに書く。

(2) 言語活動の取扱い

ア 指導上の配慮事項

(1) に示すコミュニケーション活動を効果的に行うために、必要に応じて、次のような指導をするよう配慮するものとする。

(ア) 話されたり、読まれたりする文を書き取ること。

(イ) 考えや気持ちを伝えるのに必要な語句や表現を活用すること。

(ウ) 文章の構成や展開に留意しながら書くこと。

イ 言語の使用場面と働き

(1) の言語活動を行うに当たっては、主として言語の使用場面と働きの例のうちから1の目標を達成するのにふさわしい場面や働きを適宜取り上げ、有機的に組み合わせて活用する。その際、手紙や電子メールなどの言語の使用場面を取り上げ、実際にコミュニケーションを体験する機会を設けるよう配慮するものとする。

3 内容の取扱い

(1) 聞くこと、話すこと及び読むこととも有機的に関連付けた活動を行うことにより、書くことの指導の効果を高めるように工夫するものとする。

(2) 言語材料の学習だけにとどめず、情報や考えを伝えるために書くなど、書く目的を重視して指導するものとする。その際、より豊かな内容やより適切な形式で書けるように、書く過程を重視すよう配慮するものとする。』⁽⁴⁾

以上文部科学省の高等学校学習指導要領を概観してきたが、ここでは「書くことがコミュニケーションである」「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」という文言に見られるようにライティングをコミュニケーションそのものであると捉えていることがわかる。このことに関して、「第二言語習得研究に基づく最新の英語教育」(小池生夫監修SLA研究会編)の中で次のように述べられている。

「平成元年に新しい学習指導要領が告示され、積極的にコミュニケーションを行える英語力を育成することが指導の柱になった。コミュニケーション能力の育成は、既に前回の指導要領の目標でもあったが、今回の改訂では、新科目も加わり、その流れが確固たるものになった。コミュニケーション能力は、Canale and Swain (1980) の定義によって、既によく知られるところであり、この力の育成のためには、有意味なコンテキストの中で、英語を聞かせたり (Krashen 1981)、話させる (Swain 1983) ことが必要であることも、また知られているところである。この考えの下で、教室では、ティームティーチングをはじめ、コミュニケーションを狙いとした授業指導が増加している。ライティング (書くことの) 指導の分野にも、自由に書かせる試み (小松崎 1991、栗原 1991、田中 1991、出丸 1991) や、グループで時間をかけて作品を仕上げる活動 (緑川、静、豊田 1992) の取り組みがあり、指導の流れはコミュニケーション重視の方向へ移行しつつある。」(緑川日出子)⁽⁵⁾

第2章 先行研究

筆者の英作文研究の取り組みに参考になると思われる3つの書物をここで取り上げていくことにする。まず第1に、山岡俊比古はWritingを次のように定義している「いわゆる4技能の中でWritingは、メッセージを符号化するという意味においてspeakingと同様に表出的技能(productive skill)であるとみなされる。当然のことであるが、speakingにおいては音を媒介として符号化がなされるのに対し、Writingではその言語の書記記号(graphic symbols)を媒介としてなされる。Lado (1964: 143)によれば、Writingは次のように定義される。Writingとは自分が知っている言語の書記記号を、その言語と書記記号を知っている人が読めるように書き留めることである。しかし、Writingという語の意味をより厳密にみればいくつかのレベルに分類され、それぞれのレベルでの定義が可能である。たとえば、Prochoroff, et al. (1963: 63-81)は英語の‘write’の持つ2つの意味を次のように定義している。

- ① 文字 (letters) を適切な順序の中で適切に選択するという意味において語を綴ること。
- ② 内容と場面に応じたスタイルと語いを用いて自分の表現したいと思うものを紙の上に書き留めること。

このようにライティングは最も初歩的なその言語の書記体系に対する知識からその知識をもとにした書きことばによる自分自身の思想を表現する最も高度なものまで意味するものである。

この観点からMackey (1965: 282-284) は、Writingの含むものとしてgraphics, spelling, compositionをあげ、それぞれ、アルファベット文字を正しく書く能力、文字を正しく組み合わせる能力、書きことばを通して自分自身を表現する能力であると述べている。』⁽⁶⁾筆者が目指そうとしている英作文はまさしくここに述べられている「自分の表現したいと思うものを紙の上に書き留めること」であり、「書きことばを通して自分自身を表現する能力」を高めていくことである。

次に小川芳男は「英語の教え方学び方」(1974)の中で「書く」ことを次の5段階に分けている。

- 「① penmanship
- ② copying
- ③ copying from memory
- ④ composition (free and controlled)
- ⑤ translation from Japanese into English」⁽⁷⁾

その説明として、小川は「②は、penmanshipで習得した技術を生かして教科書の英文を写し書きすることである。(中略) ③のCopying from memoryはいわゆる暗写である。教科書を見ないで暗記した英文を書くことである。(中略) ④はいわゆる英作文である。従来「書くこと」というこの英作文のことを意味していた。しかし、英作文の前に①、②、③が絶対に必要であ

る。最初から英文を書くということは不可能なことであり、もしそれを強行すると日本語になってしまう危険性が多分にある。

英作文というのは文字通り英語で文を作ることであるが、これにはfree compositionとcontrolled compositionがある。free compositionというのはcreative writingとも言われ、controlled compositionはある限度内で英文を作ること、その極端な形はわが国で広く採用されている和文英訳である。free composition とcontrolled compositionのどちらが高度であるかは容易に決定しがたい。どちらも高度でありどちらも困難である（あるいはやさしい）。ただfree compositionはcreative writingの名前で呼ばれるように単に英文を作る力ばかりでなく、言うべき何物かを持っていることが必要である。」⁽⁸⁾さらに小川は「話すことと書くこと」に関して次のように述べている。「生徒が外国語である活動にparticipateすることは必ずしも容易なことではない。そこでたいせつになってくるのは英語の教師がtolerantになり、あまり完全なことを生徒に要求しないことである。そして英語を使用をさすためにはたえず生徒をencourageすることである。母国語でも正しく使うことは必ずしも容易ではないのであるから、まして外国語の表現にあまり完全を求めてはならない。あまり完全を求めれば結果として生徒をdiscourageすることになる。もちろん教師がいいかげんなことを教えてよいということではない。教師は正しいことを教えるように務めるが生徒がいつべんにまたは極めて短時日に英語を習得することを期待するのは無理である。教師は忍耐強く繰り返すことによって徐々に正しい英語を話し書くように努力すべきである。一足飛びに語学は上達するものではない。従って間違いをおそれてはならぬ。特にproductionの面はlearn by doingであって積極的にspeakなりwriteする実践によってはじめて英語が身につくのである。」⁽⁹⁾

以上2つの先行研究はいずれも1970年代のものであり、最近の研究としては2000年に出版された「新英語科教育法入門」(土屋澄男・広野威志)があり、ライティングの指導に関して次のように述べられている。「英語のライティングはわが国では伝統的に「英作文」と呼ばれていた。「英作文」というと和文英訳を意味していたようである。高等学校の英作文や大学入試の英作文の問題にはいまだに和文英訳がある。しかし書くという行為は、本来、自分の考えや経験や感想を人に伝えたり、自分の身の周りに起きた出来事を記録したりするためにある。翻訳はかなり特殊な言語技能である。この観点から、最近の教科書の練習問題や大学入試の問題に自由英作文に近いものが出されるようになったのはよろこばしい。本章では本来の意味のライティングの活動を取り上げる。和文英訳の作業は、語や文法や表現の活用のための1つの練習手段だという立場を取る。ライティングの困難点は次の5つに分類できる。

- (1) 単語の綴り方がむずかしい。
- (2) 何を書くべきか、考えがまとまらない。
- (3) 適切な語や表現が思い浮かばない。
- (4) 文の構成の仕方がむずかしい。

(5) いつも日本語で考えたものを翻訳しようとしており、はじめから英語で考えることができない。』⁽¹⁰⁾

また、ライティングの過程として次のように述べている。「ライティングの心理的過程はスピーキングのそれに似ている。違う点はその実行過程にある。スピーキングの場合には音声を用いて表現するのに対して、ライティングの場合には文字を用いる。したがってスピーキングの「調音化」は、ライティングでは「文字化」(graphation)となる。他はスピーキングの場合とほとんど同じである。

- (1) 観念化 (ideation) : 書き手が書こうとする言語メッセージの大体の意味内容を決める。
- (2) 記憶装置 (storage) : 言語情報を貯蔵したり、必要な情報を取り出す。
- (3) 立案化 (program-planning) 観念の表現にふさわしい神経言語学的プログラムを作る。
- (4) 文字化 (graphation) : 腕や手の筋肉組織を用いて神経言語プログラムを実行する。
- (5) 監視 (monitoring) : 誤りを発見し、修正する。』⁽¹¹⁾

またライティングの指導の留意点として、次のように述べている。「ライティングはリーディング、スピーキングなどの他の言語技能の基礎があって始めて可能になる技能であるから、中学・高校ではあまり高望みをしないことが大切である。しかしライティングは自分の考えを明確にし、筋道を立てて論理的に表現する良い訓練となるので、気楽に書く習慣を身につけさせたいものである。しかし、和文英訳やディクテーションに比べると、本格的なライティングの指導は中学・高校を通じてあまり行われていないようである。その理由は、おそらく、教師が生徒に書かせたものの処理に困るためである。生徒の書いたものをいちいち添削していたら、いくら時間があっても足りないであろう。そこで、生徒の作文はいちいち添削しないこととし、次のような方法を用いることも必要になる。

- ・意味のよく通じないところに下線を引く。
- ・意味が通じれば、綴り字や文法の誤りは無視する。
- ・簡単なコメント (なるべく激励の言葉) を書く。
- ・多くの生徒が犯す共通の誤りについては、授業で取り上げて指導する。』⁽¹²⁾

第3章 授業実践

ここでは前任校の大阪府立磯島高校での平成14年4月から12月にわたる筆者のライティングの授業の取り組みを紹介していくことにする。

1. 最初の授業

4月当初、最初の授業で筆者は次のようなことを生徒に伝える。

- ・初めてのライティングの授業で戸惑いがあるかもしれないが、高校入試では素晴らしい英

作文を書いている。その自信を持って、いかに自分の伝えたいことを自分の知っている英語で伝えていくのかにこの一年間、力を注いでほしい。

- ・最終的には外国の人びととコミュニケーションができる力を養うことがこの一年の目標である。

さらに生徒に次の点に注意して英作文にチャレンジするように言う。

- ・5文型を頭に入れて、主語、動詞を絶対に忘れないようにすること。
- ・英作文をする時には問題文の日本語をすぐに英語に直そうとはせずに、まずその日本語を何度もじっくり読んでみること、次に自分が知っている英語を使い、その日本語を英語に直すことができるかを考えてみる。もしできないのなら、日本語を全体の内容は変えずに自分が知っている英語で表現できるように簡単な日本語に書き直してから、英語に直す。実際の会話の場合に自分の知っている表現で会話するのと同じで、無理に難しい英語を使って直す必要はない。
- ・最後に一番大切なことは間違いをしてもかまわない。とにかく英語に直してみよう。
- ・さらには生徒自身ががんばって作った英作文がもし黒板で解答したものと違っているような場合は必ず質問すること、どんなことでもいいから質問してほしい。授業中に質問できない場合には終わってからでもよいから質問してほしい、もし筆者がその場で即答できない場合にはこのノートに書き写し（生徒にノートを示しながら）、後で調べて次の時間には必ず返答する。

次にこれは生徒には伝えてはいないが、筆者の方針としてこの授業が少しでも異文化コミュニケーションに役立つように时时刻刻と流れて行く世界のトピックス等を授業に取り入れながら、授業を進めていこうと計画した。

2. 一学期の授業

授業では前述のように6月に開催が予定されているワールドカップサッカーの歴史等のカルントなトピックを授業に組み込みながら英作文の授業を進めていった。筆者としては何とか一日一トピックを目標にしていこうと考えていた。また、教科書の内容から話を発展させていこうと考えていた。

さて実際の授業の進め方であるが、まず教科書の左ページの簡単な英文を読んだ後、その内容について話を発展させたり、大切な文を確認する。（これは中間前に進度の関係でやめる。）右ページのExercisesに進み、一人に一问づつ当てていく。A）は主にOralで答えさせていく。生徒がわかりにくい箇所は板書する。B）は部分英作文なので、簡単なものはすぐにできるが、中には難しいものがあるのでその場合は生徒にヒントを与えながら答えさせる。これは板書し、S、Vをきちんと確認しながら進んでいく。中には筆者の考えもしなかった素晴らしい解答や筆者の判断を悩ませるような解答をする生徒がいる。この場合は必ず解答をした生徒の発想の

すばらしさを皆の前で褒め、筆者のノートに書き写しておく。C) は完全な英作文で、これに関しては生徒一人ひとりを指名する前にヒントを伝える。これは問題文の日本語を少しでも生徒が自分なりに解釈できるように助けるためのものである。次に主語と動詞に相当する日本語に下線を引かせ、確認する。(主語が明示されていない場合には主語を示す) そうして生徒を指名し、黒板に英作文を書かせ、添削していく。この際特に注意したのは生徒の英文をできる限り生かすことと絶対に×をつけたりしないことである。できる限り褒めて、生徒の英作文に対する興味を引き出そうとした。例えば、ほぼ完璧に近い文には◎を、S+Vができていればそのことで生徒を誉め、ある程度英文ができていれば○をつけるようにした。筆者は質問や素晴らしい表現があったりした場合、また筆者自身が即座に判断しかねるものは必ずノートに書き込むようにした。そうして次の授業の時に必ず生徒に説明するように心がけた。授業が始まってしばらくすると授業中に積極的に質問してくる生徒やまた授業が終わってから教卓のところにやってきて、自分の英作文の確認を求める生徒が出て来るようになり、筆者も生徒の質問に答えるべく、授業の空き時間は辞書や参考書を調べたり、家に持ち帰りずっと正誤を考えているというように充実した時間を過ごすことができた。中間テスト前にノートに書いた件数は生徒の質問やさまざまな表現を含めておおそよ65件に及ぶ。その中で特に目に付いたものは4月に授業が開始されてまもなく生徒から「天気が悪くなかった」という問題で「not fineという語句を使わずにbad weatherを使ったのでどうか」という質問があったが、これなど筆者が最初に生徒に指示した「日本語をいかに自分なりに解釈していくか」を生徒が実践してくれた一例として記憶に残っている。中間テストの採点ではこのノートを見直ししながら、生徒の表現を何度も見直し、また筆者では判断できかねるものにはALTの判断を仰ぎ、時間をかけて、生徒の表現にできるだけ点を与える方向で努力した。

中間テスト後は他のクラスと進度の兼ね合いで授業の進度を上げることにし、その結果授業中にこれまで話していた異文化コミュニケーション関係の話を少し抑え目にし、左ページの上の英文は試験には出ないということで重要な構文以外は割愛した。それ以外授業で教えていることは中間前とは大きく変化はないのであるが、このハイペースと中間後は内容がかなり難しくなったことで、かなり生徒からの質問が減少した感否めない。質問総数はおおよそ48件であった。

3. 課題プリントの分析 (1)

6月に2回にわたり英作文のプリントを生徒に課した。一回目は教科書本文の内容に関する英作文で、これはすでに生徒に返却している。2回目が今回分析しようとしているものである。問題は過去の入試問題から筆者が意図している「どのように自分のことばに書きかえることができるか」という視点からふさわしいものを3題選び、提出させたものである。今回は次の問題について生徒の表現を見ていくことにする。

「今日では日本の若者は肉の方を好むが、依然として日本における魚の需要は多い。」

ここで筆者は「いかに問題文の日本語を自分が知っている英語で書けるように書きかえていくことができるのか」ということを再度生徒に確認してほしいという願いを込めてこの課題を課した。夏期休業中に一人ひとりの英作文を添削しながら、生徒の理解度を確認していった。主眼はあくまで「上手な英語を使う」ことではなく「いかに自分なりに解釈して英語に直すか」という点にあり、この点において筆者なりに評価をしていった。もちろん英語自体の添削もした。次にその中から筆者なりの基準で選んだ生徒の英文を挙げていくことにする。すべて原文のまま書くことにする。

1. Japanese young people likes meet today, but there is a lot of demand for fish in Japan.
2. Today, Japanese young likes meet, but the fish in Japan is still a great demand.
3. Japanese young people is better meet than fish. But the fish's demand of Japan is still more.
4. Now, the young of Japanese prefer meat to fish, but a market for fish is still high.
5. Japanese young people likes beef, but people need fish.

全体を通じて共通して多かった間違いはとしては、「多い」をmanyとしている点が目立った。次に上に挙げた文について見ていきたい。全体を通して「日本の若者は肉の方を好む」という点についてはよく出来ていると思う。多いのは1, 2, 5のようにlikeを使った表現である。3, 4のように「肉」と「魚」を比較しているのは自分なりに日本語をうまく解釈しているという点で評価できる。次に「日本における魚の需要は多い」という点であるが、「需要」という言葉が難しかったのか、戸惑っている様子が多くの英文で見られた、その中で4, 5は自分なりにうまく解釈して自分が知っている英語を使って書こうとしている点でとても評価できると思う。添削をしながらこの表現に出会った時は正直うれしかった。筆者が4月に伝えたことを実践してくれていると実感したからである。この中で5の英文が生徒なりにうまく日本語を解釈しているという点で筆者が評価している英文である。

4. 二学期の授業

二学期の授業は夏休み後半の補充授業から始まり、最初の授業ではまず一学期に課した課題の講評から始めることにした。この課題に関しては「筆者が予想していた以上に出来が良かったこと、生徒が何とか自分の知っている英語を使って書こうと努力していること」などについて褒める。

二学期の授業はほぼ一学期を踏襲する形で始まった。授業内容も難しくなってきたので、今一度S + Vを中心とした5文型をしっかりと考えながら解答していくように生徒に伝える。一学期に比べると内容がかなり難しくなってきたのは事実でそれに合わせて授業の進度も遅くなったように思われる。トピックについては一学期からかなりやっているので題材を探すのが難しくなってきたのは事実であるが、何とか続けていこうと努力している。例えば学

校制度が出てきたところでは「ニュージーランドの学校制度及び小学校における日本語学習や大学」について説明する。また、問題に「英語をしゃべる時に必ず間違いをする」という文が出てきた時には「間違いをして英語はうまくなる、だから間違いをするのを恐れてはいけない」と生徒を励ましたりする。また、イギリスのfamily doctorについて説明したこともあった。

9月中旬からはPartⅡに入る。PartⅡからはPartⅠと違いテーマ別に構成されている。(PartⅠは文法事項別である)ので、興味深い内容であるが、同時に難しくなっている。ここで生徒に再度S+Vの5文型を使って英作文を作っていくことを確認する。内容は難しくなっても英作文のやり方は同じだと強調する。PartⅡでは会話文が出てくるので、男女一名づつ指名してそれぞれのパートを読ませることにする。読み終わるとクラス全員拍手でたたえるという方法をとる。中には感情を込めて大きな声で読んでくれる生徒がいて、大きな拍手を浴びて盛り上がることもあった。

中間テストの前にはPartⅡが終わり、PartⅢに入る。ここでは今までとは違い、Paragraph Writingという新しい技法が登場する。授業の進め方としてはParagraph Writingの前にParagraph Readingという形で教科書の左ページの英文を読んでいく、そして主題文に下線を引かせ、英文の構成について生徒に理解させる。さらに英文を二人の生徒に音読させる。Writingの世界からいきなりReadingの世界に入ったような感じに生徒は戸惑ったが、中間テスト後に課すレポート作成に応用してほしい旨を生徒に伝える。次に夏休み明けから中間テストまで生徒から受けた質問や生徒のすばらしい表現をノートに書き写した件数は60件である。10月末に英作文の課題Ⅰを生徒に配る。2週間後に提出させる。11月の初めには教科書が終了し、その後は英作文を含む文法を中心とした入試問題に入る。11月中旬から英作文課題Ⅱの作成に取りかかる。これは英作文の集大成でもあり、Paragraph Writingを応用させる絶好の機会でもあるのでじっくりと考える。最終的には入試問題の中からParagraph Writingに適していると思われる5つの課題を選び生徒に選択させる。

5. 課題プリントの分析 (2)

① 課題プリントⅠ

問題文はやはり過去の入試問題から選んだが、一学期の課題より長い日本語にする。これは「より長い日本語を英語に直すことに挑戦してもらいたいという意図」からであり、また「できるだけ日常よく使われているような日本語を英語に直してもらいたいとの意図」からである。問題文は次のようなものである。

「すてきな自転車をほんとうにありがとう。私が一番ほしかったプレゼントです。お兄さんに乗り方を教えてもらっています。(中略) そのうち公園まで一人でいけるようになりますと思います。友達はみんな自転車を持っているのでこれからは私も一緒に遊べます。日曜日の私の誕生パーティーにはきてください。それまでにはもっとうまく乗れるようになっていると思いますから」

注：(中略)は筆者が分量を考えて減らしたものである。

全体的な感想としては、全員よく書いてくれていた。内容的にも比較的取り組みやすかったものと思われる。全員最後まで書こうという意気込みがよく表れていたと思う。S+V等にも注意して書かれていた。次に筆者なりに選んだ英文の中から二つを紹介したいと思う。英文は原文のままである。

1. Thank you for a nice bike. This is a present which I have most wanted to. I'm taught to how to ride it by my brother. I think I will be able to go to the park by bicycle alone. As all my friends have their bicycles, I can enjoy the time together. Please come to my birthday party on Sunday. I think I will be able to ride this bicycle till then.

2. Thank you very much for the nice bike. It's just what I want. My brother is teaching how to ride the bike for me. I think I can go to the park soon. All of my friends have their bike. So I can play with them. Please come and join in my birthday party on Sunday. By that time, I will be able to ride the bike more well.

細かいミスはあるものの全体としてよく意味をとらえ、それを自分の知っている英語を使ってうまく表現している。2に関しては「私が一番ほしかったプレゼントです」を自分が知っている英語を使って精一杯表現しようと努力している姿が浮かんでくるようである。4月以来筆者が言ってきたことを実践してくれている点は筆者としてはうれしい限りである。最後に全体を通して見るとやはり「私が一番ほしかったプレゼントです」の個所でいろいろな表現が見られ、生徒がそれぞれに努力している姿が浮かび、採点していて楽しかった。また、「私も一緒に遊べます」ではplayを使っている生徒が圧倒的な数であるが、1のようにI can enjoy the time together.と表現しているのも興味深い表現であると評価している。

② 課題プリントⅡ

この課題のねらいはPartⅢで学習したParagraph Writingを実践するものである。課題の内容としては、昨年度の国公立大学の2次試験問題から難易度や内容を検討した後、Paragraph Writingに適していると思われる問題を5つ設定し、生徒に問題を選択させて、英作文をさせることにした。問題は以下の5問である。

1. In the future, do you think everyone will need to learn English? Why or Why not?
2. 「大都市で暮らすより小さな町で暮らす方が快適だ」という意見に対するあなたの意見を英語で書きなさい。
3. あなたが一年間外国に行けるとしたら、どこに何をしに行きたいか、そしてその理由は何か、英語で書きなさい。
4. 「地球にやさしく」あるいは「環境にやさしく」という言い方で環境保護の重要性が指摘されています。このことについて、あなたが心がけていること、あるいは、心がけたいと思っていることを英語で書きなさい。

5. 家庭におけるテレビの功罪（よい面と悪い面）についてあなたの考えとその理由を英語で述べなさい。

実に3分の2以上の生徒が問題3を選択している。他の4つの問題と比べて取り組みやすかったのと生徒自身が海外旅行や留学に興味を持っていることがこの結果につながっているであろうと推測できる。ここからも学校における異文化理解、異文化コミュニケーションの授業の必要性が伺える。すべての設問に関して、本当に素晴らしい表現が数多く見られた。筆者が選んだ素晴らしい表現をすべてここで紹介したいが、紙面の関係で次の機会に譲ることにする。

第4章 生徒のアンケート調査より

1. 調査方法、時期、人数

本研究では、筆者の一年間におけるライティングの授業に対する正確な評価を得るために、質問紙による調査を無記名でおこなった。上記目的のために、「授業の楽しさ」「わかりやすさ」「課題の難易」等についての7項目を設定し、最後に「一年間の感想」を自由記述してもらうことにした。調査時期は3年生三学期最後の授業時に実施する。アンケート総数は134人であった。今回はそのうち5問について考察していく。

2. 調査結果の考察

1. 「Writingの授業は楽しかったですか」

楽しかった	ある程度楽しかった	あまり楽しくはなかった	楽しくはなかった	無 回 答
20.1 (%)	57.5	16.4	5.2	0.7

20%の生徒が「楽しかった」と答え、「ある程度楽しかった」と回答した生徒と合わせると77.6%の生徒が「授業が楽しかった」と回答している。このことは、筆者が4月初から意図してきたことが生徒に受け入れられたものと判断している。生徒の書いたものは必ず褒める、生徒の書いたものをできるだけ生かしていくという基本方針が生徒に授業へのやる気を起こさせ、それが「授業への楽しさ」につながったのではないかと分析している。また一時間にトピックを挿入するという工夫も功を奏したのではないだろうか。一人の生徒は次のように評価してくれている。「英語は苦手なんで難しかった。でも先生は教え方と授業の進め方がうまかったのてなんとか楽しくできた。」ただ、気がかりな点は、21.6%もの生徒は「楽しくなかった」と回答している点である。最後の8の「感想」の中にもあったが「英語がわからない」「英語が苦手な」生徒にどのようにわかりやすい授業をしていくかが今後の大きな課題であると自覚している。

2. 「授業はわかりやすかったですか」

わかりやすかった	ある程度わかりやすかった	あまりわかりやすいとはいえない	わかりにくかった
51.5 (%)	42.5	6	0

51.5%と半数以上の生徒が「わかりやすかった」と回答してくれたことを素直に喜びたいと思う。「分かりにくかった」という回答が0で、「ある程度わかりやすかった」を含めると94%の生徒が「わかりやすかった」と回答している。筆者の心の中には一年間「一生懸命やってきてよかった」「報われた」という気持ちが実感としてある。「英語で考えたりするのが苦手だったけど『自分の知っている英語でいい』」といってくれたから難しく考えんと書けるようになったし、自分の思うことをいっぱい書けるようになってうれしかった」といった意見がある一方で、「あまりわかりやすいとはいえない」と回答した生徒の指摘の中に「授業が早くてついていけなかった」「授業の量が多くて早かった」という意見があったことは心に深く刻み込んでおかなければならないと考えている。

3. 「あなたはこの一年間でWritingに興味を持ちましたか」

興味を持った	ある程度興味を持った	あまり興味がなかった	興味がない	無 回 答
16.4 (%)	47	27.6	8.2	0.7

「興味を持った」「ある程度興味を持った」と回答した生徒が63.4%と6割に達したことは筆者の予想をはるかに上回るものであった。過半数を超えた要因としては、筆者が4月当初から指導していた「自分の知っている英語を使って表現する」「難しい日本語であっても自分の知っている英語が使えるように、日本語を考え直してみる」「S+Vを常に考える」といったことが生徒に浸透し、生徒がとにかく英語を書こうと一歩を踏み出し、それとともに興味が増していったのであろうと推察される。授業中に生徒の書いた英文を必ず褒め、絶対に×はつけないという筆者の方針が生徒のやる気を増していったのではないかと考えられる。生徒は次のように書いてくれている。「教科書の予習で英作を一人でやってみて、辞書を引いたりして結構できるようになったことがうれしい。自分で作った英作が正しいかどうかをみてもらうために、何度か訪ねたことがあったが、その時も先生は親切にわかりやすく説明してくれたので、納得できたし、自分の英作を全部否定せずに考えてくれたので自分に自信ができました。英作の答えはたった一つでじゃないと先生が言っていたので、自分なりに自由に考えてできた」

4. 「あなたはこの一年間でWritingが上達したと思いますか」

そう思う	ある程度そう思う	あまりそうは思わない	そうは思わない
11.9 (%)	41.8	38	8.2

「そう思う」「ある程度そう思う」が53.7%ある一方、「あまりそうは思わない」「そうは思わない」が46.2%あり、生徒の意見が二分している。これは設問2、3の回答に見られたように

「授業はある程度わかりやすく」「授業に興味を持った」が、一年間では「上達した」という水準までは半数近くの生徒を持っていくことができなかったということであろうと筆者は分析している。このことは次のような生徒の言葉からも裏付けられる。「今までテストの文を書くところを空欄にすることが多かったけど3年になって書いてみようと思えるようになりました。」

7. 「この一年間Writingを勉強して、今後もWritingを勉強しようと思いますか」

しようと強く思う	機会があればやりたい	あまり思わない	思わない	無 回 答
17.9	52.2	20.1	9	0.7

「しようと強く思う」「機会があればやりたい」と回答した生徒が70.1%と7割を超えたことに筆者は喜びと共にある心配を感じている。喜びとは筆者の授業を受けて、これだけ多くの生徒がWritingを今後も勉強しようという気持ちになってくれたことである。設問1と3の回答状況から考えて「授業が楽しかった」から「Writingに興味を持ち」、その結果「今後も勉強しよう」と思ったのであろうと推察される。やはり、当たり前のことではあろうが「楽しい授業」「わかりやすい授業」をして生徒に「興味を持たせる」ことがその生徒が生涯にわたり英語を勉強する大きな動機付けとなるであろう。次にもう一つ筆者が「心配を感じている」といったのは上記のように多くの生徒が今後も学んでいこうと思っているのに対してどのような受け皿があるのかということである。大学・短大・専門学校で学ぶ機会があるのはもちろんのことであるが、筆者が意図しているのは、それらを卒業後も生涯学習としてライティングを学ぶ場が確保できるのかどうかということである。グローバル化・異文化コミュニケーション等の必要性が叫ばれる昨今において、是非とも体系的な生涯学習の場を確保していく必要があると考える。

終わりに

筆者が第3章で実践してきた英作文の指導の中で柱として位置付けたのは、山岡が述べているように「自分が表現したいと思うものを紙の上に書き留めること」「書きことばを通して自分自身を表現していく能力」を高めていくことである。「はじめ」にでも述べたが、高校入試では英作文に興味を持ってさまざまな意見を述べていた生徒たちは入学後に英作文から遠ざかってしまう傾向にあり（文法等で小川が述べている「controlled composition」は少し扱う場面もあるが）、山岡が指摘しているように「外国語教育におけるwritingそのものを目標とするものはさておかれる」状況になっている。そのような状況の中で生徒たちが3年生になって受けるライティングの最初の授業でいきなり『さあfree compositionをしましょう』といったところで生徒たちは当惑してしまい、授業にはとうていならないであろうと筆者は考えた。そこで、筆者は教科書を使いながら一年をかけて生徒たちが自らの力で小川が述べているような「free composition」ができるまで英作文の力を高めていきたいと考えた。最初は教科書の中の初歩的

な段階のcomposition (山岡) を目標とし、生徒には必ず5文型を使うように指導した。定期テストにおいても5文型を使ってあれば基本的に部分点を与えたりした。一年間のうち何度となくこの5文型を生徒に繰り返し、使用することを求めた。これらを使いながら、一学期は教科書にある整序問題やcontrolled compositionができることを目指した。ただ英作文の授業だけでは単調なペースになってしまう恐れがあるために、一日一トピックを目標に、英語・英語文化に関係があることがらを一時間に一つ生徒に提示し、生徒の英語学習に対するmotivationを高めようとした。これは新しい学習指導要領の中に示された「積極的にコミュニケーションを行える英語力」育成に役立てばと願ってのことである。また、「ライティングの指導の分野にも指導の流れはコミュニケーション重視の方向に移行しつつある」(緑川日出子) ように筆者もただこの授業を「書く」ことだけに専念せずに、教科書の導入のstoryや会話文などを生徒と読んでいきながら、そこに書かれている内容を生徒と一緒に考えたりとコミュニケーションを重視する方向で臨んだ。一学期の授業で特に筆者が注意したことは小川が指摘しているように「英語の教師がtorelantになり、あまり完全なことを生徒に要求しないことである。そして英語を使用するためにたえず生徒をencourageすることである」という点である。実際、筆者は生徒の英作文を黒板に書かせた際には生徒の英作文が間違っていたとしても決して×はつけず、必ず○をつけ、特にすぐれたものには◎をつけるといったように、決して叱ったりせずに常に生徒を励まし、生徒が間違いを恐れずに英文を書いていける環境を整えようとした。6月には課題としてcontrolled compositionを課し、夏休みに添削・分析をした。ここでは土屋・広野が述べているライティングの指導方法を筆者自身が採用していることに気づく。つまり「意味がよくわからないところに下線をひく、簡単なコメント (なるべく激励の言葉) を書く」ことである。このようにして生徒一人ひとりの英文に対しコメントを書き、二学期に生徒に返却すると生徒はそのコメントを熱心に読んで、友人と見せ合ったりした。この方法がいかに有効であるか、改めて認識した。今回は夏休みということで時間にも余裕があり、文法的な誤りや綴り字の誤りなども訂正したが、時間的な余裕があまりない学期途中などではこの土屋・広野の方法を用いることが効果的であると思われる。(第2章先行研究参照) さらに彼らは本格的なライティングの指導が中学・高校を通じてあまり行われていないと指摘している、その理由として次のように述べている。「おそらく、教師が生徒の書いたものの処理に困るためである。生徒の書いたものをいちいち添削していたら、いくら時間があっても足りないであろう」この指摘を読んで筆者自身、一年間ライティングを担当してきて同じように感じてきた点である。しかし、生徒の英作文能力向上のためには教師自身避けては通れない点であるといえる。時間がないから英作文・ライティングの指導をしないのでは教師としては失格であろう。土屋・広野の方法で添削することを一つの方法であろうし、ここは筆者を含めた教師の姿勢が問われる点であろう。

二学期以降も一学期とほぼ同ような授業形態で進めていった。基本は生徒をencourageしながら、英文を書けるようにさせるというものであった。筆者自身が目指す目標は一学期が

controlled compositionであったのに対し、二学期以降はfree composition (小川) であり、自由英作文 (土屋・広野) であった。このため四月以降繰り返し行ってきた5文型を再度徹底した。その上に立ち、小川がfree compositionには「言うべき何かを持っていることが必要である」と述べているように、生徒にとって自らの意見を述べやすいと思われる5つの課題を大学入試問題から選び出した。結果については第3章でも述べたように、多くの生徒が自分なりのfree compositionを完成させることができた。これで筆者のこの一年間の目標、つまり「controlled compositionに始まり、free compositionまで生徒の英作文能力を向上させる」は達成されたとはいえる。ここに至るまでは、やはり小川が述べているように「一足飛びに語学は上達するものではない。従って間違いをおそれてはならぬ。特にproductionの面はlearn by doingであって積極的にspeakなりwriteする実践によってはじめて英語が身につくのである」という手順を筆者が一步一步踏んでいったことが大きいと思われる。この小川の本は1974年に出版されたが、それから30年近く経った現在においても、英作文の授業において効果的であるというのは驚きである。逆に2000年に出版された「新英語科教授法入門」(土屋澄男・広野威志)の中に「高等学校の英作文や大学入試の英作文の問題にはいまだに和文英訳がある」と批判的な個所があるが、筆者のこの一年間の経験から、やはり一足飛びに「自由英作文」(土屋・広野)まで行くのは難しく、やはり「和文英訳」やcontrolled compositionという過程を一步步踏んだ後に自由英作文に到達できるのではないかと考える。ただ「最近の教科書の練習問題や大学入試問題に自由英作文に近いものが出されるようになったのは喜ばしい」(土屋・広田)という点に関しては全く同感である。筆者も二学期に課題を出すために国公立大学の二次試験問題を調べたが、多くの大学が自由英作文も採用していた。また、それらの問題を課題として課した本校の生徒が興味を持ってその課題を完成させたことからわかるように大学入試に出題された英作文自体が興味深いものであることがわかる。今後も土屋・広野が指摘しているような自由英作文が増えることを期待している。

今回は三つの先行研究を取り上げ、筆者の一年間の授業実践との比較を行ってきたが、筆者の授業自体まだまだ未熟なものであることは十分自覚している。また英作文・ライティングに関する理論についてもまだまだ学習不足であることも承知している。今後はさらに英作文・ライティングの理論的な学習を積み重ねるとともにそれを授業の中に生かしていき、生徒にとって少しでも楽しい、夢が持てる英作文ライティングの授業になるように努力していきたいと考える。

〔注〕

- (1) 文部省『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』、2000年、p.1
- (2) 上掲 p.8

- (3) 上掲 p.10
- (4) 上掲 pp.66-74
- (5) 緑川日出子「第16章ライティング」小池生夫監修SLA研究会編『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店、2001年、p.287
- (6) 山岡俊比古「Ⅲ．外国語能力の要素」垣田直己編『英語教育学研究ハンドブック』大修館書店、1979年、pp.261-262
- (7) 小川芳男『英語の教え方学び方』国土社 1974年、pp.169-188
- (8) 上掲 小川
- (9) 上掲 小川
- (10) 土屋澄男・広野威志『新英語科教育法入門』研究社、2000年、pp.103-107
- (11) 上掲 土屋・広野
- (12) 上掲 土屋・広野
- (13) 第3章 授業実践で使用した教科書 佐々木 昭『Evergreen WRITING』、1999年、第一学習社

(はやし たかお 大阪府立守口東高校教諭)

(指導：田中 圭治郎 教授)

2003年10月15日受理